

## 近江の飛鳥・白鳳時代、古代国家の誕生

### 1. 激動の時代の近江

645年に大化の改新を断行した中大兄皇子<sup>なかのおおえのおうじ</sup>は、唐の律令制度<sup>りつりょうせいど</sup>を導入し、皇族や豪族の直接支配を廃する公地・公民制<sup>こうち こうみんせい</sup>を基に、天皇中心の中央集権的な国家造りを始めました。一方、朝鮮半島では、高句麗<sup>こうくり</sup>・新羅<sup>しらぎ</sup>・百済<sup>くだら</sup>の三国が対立し、新羅が唐と結んで倭国<sup>わこく</sup>と親しい百済を圧迫するなど、政情は不安定でした。

このような世情の中、内政では、急激な改革が大和や地方の豪族との軋轢を生み、外交では、百済救援が名目の朝鮮半島出兵(663年)<sup>はくすきのえ</sup>が白村江で大敗し、唐・新羅の倭国侵攻という不安と緊張を招きます。こうした内憂外患の状況を払拭するため、667年、畿内を離れ、琵琶湖辺の大津に遷都が行われました。中大兄皇子は即位して天智天皇<sup>てんじてんのう</sup>となり、弟の大海人皇子<sup>おおあまのおうじ</sup>、側近の藤原鎌足<sup>ふじわらのかまたり</sup>らと共に、一層の改革を推し進め、国力増強を図りました。しかし、天皇の死後の672年、その後継を巡り大友皇子<sup>おおとものおうじ</sup>と大海人皇子<sup>じん</sup>が対立し、壬申<sup>しんらん</sup>の乱が起こります。この乱で近江朝側が敗戦、大津宮は廃され、都は大和の飛鳥浄御原<sup>あすかきよみはらのみや</sup>宮、さらに藤原京<sup>ふじわらきょう</sup>へと遷されていきます。

一方、国家の施策として仏教の興隆が図られ、飛鳥・白鳳文化と呼ばれる中国・朝鮮三国の影響を受けた仏教文化が色濃く形成され、近江にも数多くの寺院が建立されました。また、宮の造立などにかかる鉄生産<sup>はんでんしゅう</sup>や班田収授<sup>はんてんしゅうじゅ</sup>法の施行に伴う地域開発も促進されます。

今回は、このような激動の時代の近江の埋もれた文化財を紹介します。

### 2. 近江大津宮の造営と壬申の乱

#### (1) 近江大津宮

『日本書紀』<sup>にほんしょき</sup>には大津宮に関連する建物の記載があるものの、その実態は明らかではなく、その位置も、穴太、滋賀里、錦織、大津市街地など、様々な推定地が挙げられてきました。



近江大津宮錦織遺跡：内裏南門跡（東から）

しかし、昭和49年に錦織地区で行われた調査で宮に関わる門跡が発見され、長年の所在地論争に終止符が打たれました。

その後の発掘調査により、南の朝堂院<sup>ちやうどういん</sup>とは内裏南門<sup>だいりなんもん</sup>と回廊で仕切られ、南門の東西内側に塀で囲まれた一辺37mの空間を持ち、さらに、南門から80m北には、北と東西を塀で仕切られた空間に4面に庇<sup>だいらせい</sup>を持つ内裏正殿<sup>でん</sup>、その北に東西の長殿を挟んでもう1棟の庇付の建物が配されていることがわかってきました。大津宮は、645年の大化の改新後

こうとくてんのう なにわながらとよさきのみや  
 に孝徳天皇が遷都した難波長柄豊崎宮（前期  
 難波宮）の構造によく似ているという説があ  
 りますが、詳細については、京域の問題も含  
 めて、今後の課題として残っています。



近江大津宮錦織遺跡

：内裏正殿跡の東南部(南から)

## （2）壬申の乱と「勢多の唐橋」

壬申の乱は、主に大和と近江を舞台に展開  
 しました。近江では、「横川（米原市醒ヶ井  
 付近）」、「犬上川の濱」、「野洲川の濱」、  
 「勢多橋」、「栗津」などで激戦が展開され  
 ました。戦場の痕跡は残っていませんが、舞  
 台の一つとなった「勢多橋」の橋脚の基礎が、  
 今の唐橋の下流80 m程の川底で見つかって  
 います。異なった時代の複数のものが見つか  
 っていますが、その中で最も古い橋脚が壬申  
 の乱当時のものなのです。川底に横木を並べ、  
 その上に木材を六角形に組んだ台を置き、浮  
 かび上がらないように大量の石を重しとして  
 使っています。台には橋脚の柱を受ける穴が  
 6カ所設けられており、その位置から幅約8.  
 5 mもの堂々とした橋だったようです。この  
 構造のものが韓国の慶州でも見つかってお  
 り、近江に住む渡来人の先進的な技術が発揮  
 されたものと考えられます。



唐橋遺跡：六角形に組まれた橋脚の台材



一番古い  
 橋脚を元に  
 復元した勢  
 多橋の模型

## 3．寺院の建立

### （1）近江大津宮と四つの寺院

天智天皇は、大津宮の無事を祈念して、宮  
 の北西山中に崇福寺を建立しました。主要伽  
 藍は、谷を隔てた三つの尾根に分かれており、  
 中尾根の塔心礎から、銅、銀、金、瑠璃の四  
 重の舍利容器が見つかっています。大津宮の  
 周囲にはこの崇福寺跡以外に、北1の丘陵  
 上に南滋賀町廃寺跡、南15に園城寺前身  
 寺院跡、更に北3に穴太廃寺跡と、宮を囲  
 むように白鳳期の寺院が建立されています。  
 いずれも交通の要衝に位置しており、宮を守  
 護するために建立されたのかも知れません。



銀製押出仏 創建時軒丸瓦 再建時軒丸瓦  
 穴太廃寺跡出土遺物



穴太廃寺跡：手前が再建講堂、奥が再建金堂(北から)



南滋賀町廃寺跡：発掘された食堂跡

## (2) 壬申の乱と寺院

壬申の乱の激戦地に、乱後に遷都された藤原宮や藤原京内に建立された本薬師寺もとやくしじと同じ瓦を用いた寺院が建立されています。



三大寺跡出土の本薬師寺式軒瓦（醒井小学校出土）  
 「横川」に米原市三大寺跡さんだいじあと、「犬上川の濱」  
 に彦根市高宮廃寺跡たかみやはいじあと、「野洲川の濱」に草津  
 市花摘寺跡はなつみでらあと、「勢多橋」、「粟津」に大津市  
 国昌寺跡こくしょうじあとです。三大寺跡では版築を施した一  
 辺2.4mの方形の基壇が見つかっており、花  
 摘寺跡では寺域の概略が確認されています。

国昌寺跡は弘仁11年(820)に近江国分寺  
 となっています。



三大寺跡：基壇の周りに瓦が堆積している

## (3) 近江の白鳳寺院

近江には、近江大津宮や壬申の乱などに関  
 わって建立された官営の寺院以外に、各地の  
 有力者たちが建立した数多くの氏寺が存在し  
 ています。寺院建立や経営に対する助成や税  
 制面の優遇などの国の仏教興隆策により、競  
 って寺院の建立が行われたのです。特に、7  
 世紀後半の白鳳時代には、その数は、現在知  
 られている寺院跡の8割にあたる約60カ寺  
 に及んでいます。

## 4. 地域開発の推進

### (1) 鉄の生産

近江大津宮や藤原京の造営、官寺の建立な  
 ど大規模な土木事業が相次ぎ、鉄の需要が高  
 まりました。その供給地として、原料や燃料  
 が豊富で、大和に近く、水運が発達している  
 近江が一躍注目されました。特に、瀬田川右  
 岸の南郷から左岸の瀬田丘陵には、南郷・  
 芋谷いもだに・源内峠げんないとうげ・木瓜原ぼけはら・野路小野山遺跡のじおのやまいせきな  
 ど、7世紀中頃から末頃までに操業を開始し  
 た数多くの製鉄遺跡が分布しています。中  
 でも大津宮時代頃の源内峠遺跡では、鉄を作る  
 時に生じる鉄滓てっさいの量が遺跡全体では50トン



以上と推定でき、大規模な操業が行われていたと考えられます。



南郷遺跡：製鉄炉の列石



源内峠遺跡：鉄滓が流れ出ている製鉄炉

## (2) 平野の水田の開発

近江には、郡ごとに統一された広大な条里型水田が広がっています。高月町井口遺跡で条里に関連する溝が見つかり、少なくとも伊香郡の条里型水田施行の開始時期が飛鳥時代にさかのぼることが明らかになりました。同じ頃、甲良町下之郷遺跡では、水がかりの悪い扇状地形の台地を横断する大規模な灌漑用水路が掘削され、日野川上流の河岸段丘でも、日野町北代遺跡のように、集落の大規模な拡大が認められます。この頃のこうした状況は、大化の改新により定められた班田収授法により口分田を確保する必要が生じたため、墾田の開発が奨励されたことを示しています。鉄生産の推進と鉄の普及、渡来系氏族のもたら

す土木技術なども、開墾の困難な地域の開発を可能にしたのです。



井口遺跡

：飛鳥時代に掘削された条里溝（上方が集落）



下之郷遺跡

：扇状地に掘削された灌漑用水路

5. 律令体制の確立  
飛鳥・白鳳時代は、古墳時代の各地の諸豪族を通じた間接的な地域支配から、公地公民制を基にした律令による天皇の直接的な支配体制へ大きく転換した時代です。その舞台となったのが近江であり、このことが、その後の歴史に大きな影響を与えていったのです。

